
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共共課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究—トランスナショナルなネットワークと現地の応答」

2022 年度第 1 回研究会（通算第 6 回目）

日時：2022 年 7 月 10 日（日）14:00–17:30

場所：ZOOM 会合

概要：2022 年 7 月 10 日（日）に 2022 年度の第一回の研究会を実施した。大阪大学の菅原由美氏が「NU とムハマディヤが目指す「穏健なイスラム教」：歴史と記憶の観点から」、AA 研の河合文氏が「非ムスリムからみた「マレー」とイスラーム：半島マレーシアのオラン・アスリを事例として」と題してそれぞれ研究報告と、それに続く質疑応答を実施した。各報告の概要は下記の通りである。

非ムスリムからみた「マレー」とイスラーム：半島マレーシアのオラン・アスリを事例として

河合文（AA 研）

はじめに

マレーシア半島部の先住民「オラン・アスリからみたイスラーム」を主題に、マレーシアにおけるイスラームをエスニシティとの関連から報告した。マレーシアでは、憲法において「マレー人」がムスリムを信奉する人と定義されており、宗教とエスニシティが強く結びついている。マレーシア政府は、2000 年代頃までオラン・アスリを「マレー」の下に位置付ける形で対応してきた。しかし 2010 年代後半には、マレーとは異なる「オラン・アスリ独自」のアイデンティティの主張が盛んにみられるようになり、自らの IC に記載された「信奉宗教：イスラーム」の削除を求める動きも生じている。そこで本報告では、そもそも彼らはなぜムスリムとして登録されているのか、さらにこうした訴えが近年みられるようになったのはなぜかといったことを問いに掲げ、歴史的変遷を辿った。

植民地時代～マラヤ非常事態宣言期

植民地時代には、英領マラヤの人びとの出生・死亡が当人の人種とともに登録されるようになり、センサスを通じて人口も人種別に把握されるようになった。そして「マレー」が法的にイスラーム信奉者であると定義された。植民地化以前より半島で生活してきた人びとのうち、ムスリムの支配者の下にある人びとは「マレー」と定義された一方、そうした権力者の下にない奥地に暮らす土着の人びと「アボリジニ」は政府の関心をひくことはなかった。

しかし、太平洋戦争後のゲリラ活動を受けて発令されたマラヤ非常事態期(1948-1960)、政府は奥地に介入する必要性が生じた。そこで1953年にアボリジニ法を制定して統治外にあった奥地の人びとを「アボリジニ」と定め、アボリジニ局の管轄下においた。いっぽう独立へ向けた協議の結果、英領マラヤの「先住民ブミプトラ」であるという理由からイスラームと結びついたエスニシティであるマレー人の優先性(ketuanan Melayu)が憲法に織り込まれ、シンガポールを除く英領マラヤの独立が1957年に達成された。

1960年代以降

マラヤ非常事態が終了した翌年の1961年、それまで治安維持活動の対象であったアボリジニを「マレー人部門」へ統合し、国民生活の潮流に組み込むことが宣言された。そして1963年にサバ、サラワク、シンガポールが加わりマレーシアが成立した際、「アボリジニ」という公称はネガティブなイメージを伴うという理由より「オラン・アスリ」に変更された。

その後のオラン・アスリにとってのイスラームは主に①-③の事柄を背景として、複雑な様相を呈した：①共産主義者の活動再活性化をうけた第二次非常事態(1968-1989)における、治安維持と経済開発を結びつけたKESBAN思想による活動の推進、②1969年の「マレー人」と「華人」の人種衝突を受けて打ち出されたマレー優遇策を盛り込んだ新経済政策(NEP)、③1980年代に高まったダッワのもと伝統主義的イスラームを掲げる政党PASに対抗して与党UMNOが打ち出した近代化とイスラームを結合した政策。

こうした情勢を背景に、経済開発とマレーの信奉宗教であるイスラームが融合された形で対オラン・アスリ政策が実施され、ムスリムとして登録されたオラン・アスリに優先的援助を行うことも生じた。便宜的にムスリムとして登録される人も多い一方、権力構造と共に押し付けられる開発とイスラームや「マレー」に対して複雑な感情も蓄積されていったのがこの時代である。国民登録上はエスニシティと宗教は別々に扱われているが、処々の歴史により、ムスリムになることはマレー化を意味しオラン・アスリ性の否定と同等だと認識する人も存在する。しかしその一方、マレーと同様にムスリムの学校教育を受け、官職に就くオラン・アスリも増えつつあるのが現状である。

おわりに

ムスリムの権力者(マレー)の直接的支配を受けていなかった人びとが、非常事態をきっかけにアボリジニと定められたのが、オラン・アスリの始まりである。マレーシア独立後、一時期までは国家状況を背景に積極的な「イスラーム化」の対象とされてきたが、近年はマイノリティを重視する国際的潮流や「マレー」のみを優先させる政治の限界の認識をもとに、政府もオラン・アスリを一つのエスニシティとみなす傾向が強まりつつある。こうした変化

の下、「非マレー」としてのオラン・アスリ性を非ムスリムであることに求める人びとが、IC より「イスラーム」の削除を求めていると理解できる。そのような人びとにとってはイスラームは自らの集団の歴史やエスニシティとは相いれないものである。その一方、官職に就くオラン・アスリはほぼムスリムである。こうした人びとはエスニシティと宗教の結びつきを絶対化、本質化することなくイスラームを実践することで、それが国家社会における社会関係資本や文化資本として機能し現在の地位にあるとも考えられる。

NU とムハマディヤが目指す「穏健なイスラーム」－歴史と記憶の観点から

菅原由美（大阪大学）

インドネシアの最大ムスリムグループ NU（ナフダトゥール・ウラマ）は、インドネシアのイスラームを「寛容なイスラーム（Islam toleran）」であるとして、2015 年の年次総会において、インドネシアはインドネシア式イスラーム「イスラーム・ヌサンタラ（Islam Nusantara）」を目指すべきであると発表した。これは、戦いによってではなく、文化的アプローチによって、ヒンドゥー文化が定着していたジャワにイスラームを広めたとされる九聖人（ワリ・ソンゴ）のように、土着の文化的慣習を尊重するべきであるという従来の NU の方針に新たな表現を与えただけのものであるが、近年イスラーム主義派が一定の影響を持ち始めているインドネシアにおいて、他のイスラーム団体からだけでなく、NU 内部からも批判が相次いだ。現在もこのコンセプトを巡って議論が続けられているものの、インドネシア政府からは強い支持を受けている。

しかし、本当にインドネシアのムスリムは他宗教に対し寛容なのか、またはどの程度寛容なのかという点はそれほど明らかな話ではない。NU とムハマディヤの指導部およびメンバーの許容度に関する調査では、指導部の許容度は一般メンバーに比べ高いという数字がでているものの、コミュニティ内に異教徒の礼拝堂を建設することに同意するかという質問に対しては、一般メンバーも指導部も 8 割近くが否定しており、NU・ムハマディヤの指導部も必ずしも「リベラル」になろうとしているわけではないという結論づける論稿も出ている。インドネシアのイスラームを代表してきた NU やムハマディヤに対し、伝統派・保守派、近代派・改革派などの形容がついてきたが、時代や文脈によって意味するところは変わってきており、この 2 つの団体の歴史をもう少し詳細に見る必要がある。

ムハマディヤはジョグジャカルタのカウマン地区でアフマド・ダフランによって設立された。メッカでは改革派のアフマド・ハティブ・ミナンカバウイと共に学んだとされているが、帰国後はオランダ植民地政庁との協力の下にムハマディヤを設立し、オランダ領東インドにおいて学校・病院などの整備に貢献した。NU はムハマディヤよりかなり遅れて、ハシ

ム・アシュアリによって設立されたのだが、実はのちに NU ジョグジャカルタ支部で活躍するムナウィルはダフランと交友関係にあった。この2つが方向を違えるのは、ダフランたちの次の世代である。1925年にイブン・サウードによりワッハブ派の影響力が中東で増し、1926年に世界イスラーム会議への招待がオランダ領東インドにも届いたことにより、ムハマディヤとイスラーム同盟が参加したが、伝統派は伝統的慣習の尊重を求めて、別組織として世界会議に参加することになり、これが NU の結成につながった。一方、ムハマディヤは1927年ブカロンガンで開かれた総会において、イジュティハードを行い、ファトワーを出す部署を設立し、改革派へ歩を進めたが、これはダフランの意図と必ずしも同じものではなかった。

日本軍政期には、インドネシアの全ムスリムをまとめるマシュミという団体が設立されたが、独立後1952年には NU メンバーはマシュミから脱退し、NU 党を結成した。NU はスカルノの議会制民主主義の解体に融和的であったが、マシュミは反スカルノ的立場にあり、さらには1960年地方反乱に協力したとして、マシュミが非合法化されたことにより、ムハマディヤは政治への関与をやめてしまう。NU も 930 事件後スハルト政権によるイスラーム団体への圧力により、政治への関与を弱めた。

しかし、国際的ネットワークを持つイスラーム組織の活発化により、この10年間インドネシアで起きていた保守転換において、両組織ともにこれまでのバランスを保つことが難しくなっている。NU 内部に、現在の指導者たちが NU の創設者たちの正しい道から逸脱しているのを正すとする「NU 直線グループ (NU Garis Lurus)」ができ、インターネットやソーシャルメディアを通じて彼らのメッセージを広めている。ムハマディヤの指導部も進歩派と保守派の交代が続き、イスラーム主義者の勧誘によってさらにメンバーを失うことへの懸念が常に付き纏っている。

こうしたなかで、2015年、NU が「イスラーム・ヌサンタラ」を唱えたように、ムハマディヤは「進歩性を携えるイスラーム (Islam Berkemajuan)」をモットーに掲げ、革新と変化を受け入れるだけでなく、社会の近代化の担い手となるイスラームを目指すことを主張した。ムハマディヤにおいては、創始者ダフランは九聖人の一人、スナン・ギリの子孫として取り上げられることはなく、またダフランに関する正確な記録を収集することはなく、むしろ「今日のムハマディヤは未来のムハマディヤとは異なる」と言った、継続する変化を是認するダフランの台詞が強調されている。一方、NU は、背景に他のイスラーム世界とのつながりを持ち、また他宗教に寛容で、平和的に文化を使った布教をおこなったとされる九聖人の歴史をあらたに「創り」続けることにより、NU の正統性を主張する方策をとっている。西欧文化のグローバル化やグローバル・イスラームの登場という新たな課題の前に、両団体はその歴史と記憶を時代の必要性に合わせて改変しながら、利用し続けている。

文献

Laffan, Michael. 2003. "The Tangled Roots of Islamist Activism in Southeast Asia." *Cambridge*

Review of International Affairs 16 (3): 397–414.

Menchik, Jeremy and Katrina Trost. 2018. “A ‘Tolerant’ Indonesia? Indonesian Muslims in Comparative Perspective,” *Routledge Handbook of Contemporary Indonesia*, edited by Robert H. Hefner: 390-405. New York: Routledge.

Meyer, Verena H. 2021. “Memory and Difference Coherence and Paradox in Javanese Muslims’ Stories of the Past” Dissertation, Columbia University.

Schmidt, Leonie. 2021. “Aesthetics of authority: ‘Islam Nusantara’ and Islamic ‘radicalism’ in Indonesian film and social media.” *Religion* 51 (2): 237–258.

(以上終わり)